

醍醐寺蔵『妙法蓮華経釈文』の声点加點について

—前後半の相違と表紙見返中段記事の解釈—

佐々木 勇

○、本稿の目的

醍醐寺蔵『妙法蓮華経釈文』（以下、本資料という）は、十世紀末より十一世紀初頭に書写・加點され現在に伝わる法華経音義の一本である。国語史研究においては、殊に、日本漢音資料として活用されてきた。中でも、声点についての研究が重ねられてきている。

本資料の声点は、序文より全体に亘って見られる。これらの声点中で、掲出字に加點された声点の研究が蓄積されている。

本稿は、本資料の声点全体を検討対象とし、その加點様式を見た上で、その加點がいかにして可能であったのかを考えようとするものである。

一、醍醐寺蔵『妙法蓮華経釈文』の訓点について

声点に限って検討する前に、本資料の訓点に関する先学の研究成果をまとめておく。

本資料の訓点については、すでに論考が多い。左に、本稿と深く関わる論文に限り、発表年月順に掲げる。

論文Ⅰ 吉田金彦「法華経釈文について」（『国語国文』第二一卷

第二号、一九五二年三月）

論文Ⅱ 小松英雄『日本声調史論考』（風間書房、一九七一年）

「図書寮本『類聚名義抄』における《正音》の体系（Ⅱ）補説」

論文Ⅲ 馬淵和夫「醍醐寺三寶院蔵『法華経釈文』の字音について」

（『国語と国文学』第四九卷五号、一九七二年五月）

論文Ⅳ 沼本克明「醍醐寺本法華経釈文の声調体系について」

（「訓点語と訓点資料」第四八輯、一九七二年六月。後、加

筆修正して『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』

（武蔵野書院、一九八二年）に所収。）

論文Ⅴ 宮沢俊雅「妙法蓮華経釈文の初稿と改訂について」（『国

語と国文学』第五二卷六号、一九七五年六月）

本資料が眞興（九三五—一〇〇四）の書写・加點であるとする寺伝には、疑義が出されている（論文Ⅱ・Ⅲ）。しかし、本文・訓点ともに、眞興と同時代のものであり、眞興の加點であることを完全には否定できない¹⁾。

訓点には、ヲコト点（喜多院点）・声点・仮名・漢字による補記がある。この訓点は、すべて一筆であるとされている（論文Ⅲ）。また、注文への加點は移点であることが明らかにされている（論文

V)。しかし、掲出字への加點(声点)が移点か否かは、認定が分かれてゐる(論文IIとIV)。

なお、本資料の卷上一九才(古辞書音義集成(汲古書院)所収複製本三九頁)までとそれ以降とは、加點の形態が異なることが右の諸論文によつて指摘されている。以下、それぞれを、本資料の前半と後半と呼ぶ。⁽²⁾

前半・後半の相違点のうち、声点に関して指摘されているのは、次の点である。

①前半は、掲出字ばかりでなく反切に対しても声調が標示されている。しかし、後半には反切の声点が見られない(論文II)。

②掲出字声点において、星点を補う圈点(論文IV)は存する。しかし、後半にはほとんど見られない(論文IV)。

この状態を論文IVでは、次のようにまとめている。

二十丁目以前は、ヲコト点、仮名を加えながら丹念に訓読し、かつ漢字音については、掲出字と反切との両者に声点を加え、理論的に字音を解し乍ら加點しているものが、それ以後は、少くともそういう緻密な行為が省略されていると考えられる。

「理論的に字音を解」するとは、声点については、平声・去声では全濁・次濁が重、全清・次清が軽、上声・入声では全濁が重、次濁・全清・次清が軽とすることをいう。

二、声点の加點様式

I. 掲出字声点

まず、最も多くの加點例が存し注目されてきた、掲出字の声点から検討する。

1. 従来の研究
掲出字の声調体系については、既に検討がなされている。その結果の要点を左に示す。

論文II 上声重と上声軽とを意図的に識別している場合がある。その識別は、optionalである。

論文IV 祖点は、四声に輕重を区別する八声体系であった。それが、移点によつて乱れたものである。

両論文とも、本資料掲出字声点(日本漢音で一般的な六声体系よりも多くの声調を区別すること)と、その区別が徹底していないことを指摘している。

まず、右の結果を確認することから始めたい。

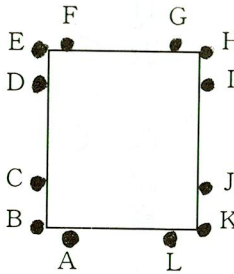
本稿では、掲出字声点を前半と後半とに分けて分析する。また、星点とそれ以外の声点とは機能が異なることが明らかにされている(論文I II III)ため、これらも区別する。

2. 前半の掲出字星点

はじめに、最も多くの加點例が存する星点について述べる。

①加點例

本資料を通覧すると、掲出字声点は、次のA~Lの十二の加點位置に分けられる。よつて、これらを区別して全例を認定してみる。欄外補入の例は、除外する。⁽³⁾



左に具体例を掲げる。従来の認定と同じものは、少数挙例とした。
 (当該字の下には複製本の頁数と行数を示す。以下同じ。)

A 如 九 5
 聞 九 6
 城 一 〇 2
 人 一 一 4

無 一 二 1
 煩 一 二 2
 其 一 二 7
 名 一 二 7

陳 一 三 1
 摩 一 三 2
 樓 一 三 4
 等 八 二 例

B 汲 一 四 7
 耶 一 六 7
 於 一 九 1
 桓 二 一 4

修 二 二 3
 圍 二 五 7
 肩 二 八 6
 乘 三 八 7

以上 八例

C 誰 三 三 1
 經 九 3
 山 一 〇 6
 等 九 〇 例

D 序 九 4
 是 九 6
 善 一 九 2
 道 三 〇 4

五 三 〇 1 (以上、論文IVで下方の点として挙げられた例)

坐 二 五 6
 重 二 六 2
 動 二 七 1
 在 一 二 7

迄 三 三 2
 婢 三 八 5
 指 三 九 5
 計 一 二 例

E 逸 二 六 1
 好 三 四 6
 礼 二 五 6
 不 一 七 5

若 一 三 1
 箏 一 六 3
 奔 一 八 5
 等 二 六 例

F 我 九 6
 慙 一 二 2
 有 二 三 5
 所 一 六 2

彼 一 九 4
 掌 二 〇 5
 介 二 一 4
 等 一 九 例

G 妙 八 7
 第 九 5
 逮 一 二 3
 馱 一 四 5

H 樂 一 七 7
 智 一 九 3
 到 一 九 4
 等 三 一 例

布 三 九 1
 見 二 九 7
 義 二 六 4
 漏 一 一 6

等 五 四 例

I 利 一 二 4
 四 二 二 6
 兩 二 七 1
 事 三 七 2

(以上、論文IVで下方の点として挙げられた例)

方 一 二 2
 自 一 二 6
 養 一 八 3
 閑 一 九 5

導 二 三 3
 現 三 〇 3
 乘 三 八 7
 計 一 一 例

J 法 八 7
 得 一 二 4
 結 一 二 6
 等 四 八 例

K
 属 一六六
 六 一七一
 勃^じ 二一二
 塔 三一三

昭 三七三
 以上 五例

L
 佛 九七
 岨 一〇五
 葉 一三三
 薄 一五三

學 一六四
 殖 一八四
 達 一九三
 跋 二二二

鉢 二二五
 白 二八七
 以上 一〇例

②『廣韻』声調・声母清濁との対応関係

右の認定結果を、従来の研究に倣って、『廣韻』の声調・声母清濁によって分けると、後掲表1となる。⁽⁴⁾

A点は、『廣韻』平声の全濁・次濁が大部分である。B点は、例が少なく、『廣韻』平声という以上の傾向を指摘できない。C点は、『廣韻』平声の全清が大部分である。D点は、『廣韻』上声の全濁に例が多い。G点は、『廣韻』去声全体に亘るが、全清にやや例が多い。H点は、『廣韻』去声全体に亘る。I点は、『廣韻』去声の全濁・次濁が大部分である。J点は、一例を除き、『廣韻』入声の全清・次濁字に加点されている。K点は、例が少なく、『廣韻』入声という以上の傾向を指摘できない。L点は、『廣韻』入声の全濁に例が多い。

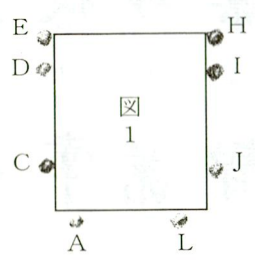
右の実態に、加点例数と加点位置とによって解釈を加えると、次の如くなる。

B点は、A点と同じく『廣韻』平声の全濁・次濁に対応するものでありながら、例が少なく、A点と加点位置が近い。よって、B点は、A点が外側にずれたものである。同様に、F点はE点のずれたもの、G点はH点のずれたもの、K点はL点のずれたものである。

D点は、E・F点と相補分布をしている。よって、E・F点とは、別個の調値を示していると考えられる。

I点は、G・H点と相補分布をしていない。よって、G・H点と別個の調値を示しているとは考えられない。ただし、I点をH点の単純なずれとすることにも躊躇される。なぜならば、G点と異なり、I点は全濁・次濁字に集中するからである。H点と区別しようとしたが、その区別は随意的に行なった、あるいは不徹底にしか行なえなかったと解釈すべきものであろう。

よって、前半掲出字星点の基本位置は、次の図1のようになる。⁽⁵⁾



加点位置および加点状況から、A・B点は平声重点、C点は平声軽点、D点は上声重点、E・F点は上声軽点、G・H点は去声軽点、I点は去声重点(随意的)、J点は入声軽点、K・L点は入声重点と判断される。

3. 後半の掲出字星点

①加用例

次に具体例を掲げる。

A 臣 四〇六 魔 四二一 令 四二七 勤 四三三

祇 四九四 牛 五四二 梨 五四四 等 三八例

B 頭 四〇三 傻 四〇五 除 四〇七 林 四二六

膏 四二七 眠 四三一 儀 四三四 等 一四九例

C 軒 四〇一 欣 四〇四 宮 四〇六 鬚 四〇七

兵 四二二 増 四三六 衣 四五二 等 七四例

D 等 四六六 丈 五〇三 父 五二四 脊 八三六

頁 一一九一 以上 五例

E 往 四〇四 猛 四一三 五 四一六 敷 四二三

忍 四三三 打 四四一 搥 四四一 等 二九例

F 手 四〇二 語 四九一 少 五九四 九 六五三

幼 八八六 以上 五例

G 冥 四二四 戒 四三三 寫 四三七 歲 四四四

價 四五二 盛 四五五 茂 四五五 等 一六例

H 蓋 三九七 詣 四〇四 版 四〇六 剝 四〇七

誦 四一三 禪 四一五 定 四一五 等 一四五例

I 瘞 六〇四 偽 八五二 競 八九七 纓 九〇五

遺 九二三 悶 一一三一 附 一二二二 澍 一三七五

J 肉 四〇二 駿 四一四 寂 四二四 默 四二五

厚 四三三 構 四四三 活 四五五 等 七八例

K 食 四四七 特 四七七 益 四八三 實 五五三

逸 五五三 勿 五五五 習 五六四 等 四〇例

L 獨 四一 2
 直 四 五 3
 著 四 六 1
 十 五 一 2

蜜 五一 4
 媛 五六 3
 脱 五 八 1
 等 一 六 例

② 『廣韻』声調・声母清濁との対応関係

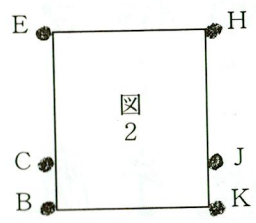
本資料後半の星点を前半と同様に処理すると、後掲の表2となる。
 表2は、次の点で、前半(表1)と異なる。

A点・B点は、ともに平声重点と考えられる。しかし、加点例数はB点の方が多く、これが基本位置であったと考えられる。

D点は、『廣韻』上声全濁字に集中するもの、上声全濁字全体では、E点を加点した例の方が圧倒的に多く、E点と相補分布していない。

また、K点がL点よりも多い。よって、L点は、K点のずれたものと解される。

したがって、後半の掲出字星点の声点図は、次の図2のようになる。(比較の便のため、図1と同じA↘Lを用いる。以下同じ。)



これは、前半の様式(図1)と異なる。しかし、上声全濁字の去声化例が皆無である点は前半掲出字星点(表1)と等しく、日本漢音の六声体系の傾向に反する。また、D点が上声全濁字に、I点が去

声全濁・次濁字に集中することは前半と等しく、前半の様式(図1)の名残を見せるものと解釈することができる。

4. 星点以外の掲出字声点

本資料には、星点以外に各種声点が加点されている。これについても先学の研究がある。特に論文IIでは、全例を挙げて検討されている。筆者も独自に調査したが大勢は変わらない。よって、ここでは前半と後半との違いを中心に、略述するにとどめる。

① :点(論文IIのBD型)

:点は、次清音字に加点されるのが原則であることが指摘されている(論文I↘IV)。この点は、筆者も確認した。次清音を特立するのは、有気音であることを示すためである。

:点は、全六六例である。次清音に加点されるのが原則であるから、軽重を区別すれば軽点となるはずである。しかし、二五例は、重点の位置に加点されている。よって、:点は、軽重を区別していないと考えられる。

なお、:点が次濁字に加点された例が二例有る。その二例はともに後半部分に存する。

② :点(論文II C型)

:点も:点同様、次清音字に加点されるのが原則であることが指摘されており(論文I↘IV)、筆者も確認した。

:点は、B点が六例(全例後半部分)存する他は、C・E・F・G・H・J点である。よって、軽声を示していると判断される。この:点は、陀羅尼で有気音を示した:点を応用し、軽重をも示そう

とした声点であると考えられる。：のままでは縦に長く、軽重を正確に示すのが困難なため、これを横にしたものである。⁽⁸⁾

なお、…点が全清音字に加点された例が三例有り、その三例はすべて後半部分に存する。

③○点 (論文IIのE型)

圏点は、論文IVで全例を挙げて検討されているとおり、星点を補う声点である。基本的には、反切等で示された「又音」の声調を示している。全三八例が前半部分に存する。⁽⁹⁾

この圏点にも、D点・I点が存する。次に全例を掲げる。⁽¹⁰⁾

D点 下 二九四 後 三二一 去 三二二 犬 一〇七
I点 在 一二七

④∞点 (論文IIのF型)

論文IIに指摘されるとおり、「騫 (二四七)」の一例のみである。次清音を示す…点の変形であるとする論文IIの解釈に従うべきであろう。ただし、次清音字でありながら、重点(B点)が加点されている。

⑤L点 (論文IIのG型)

喉音匣母・曉母を示すのが原則であり、例外的に、齒音と喉音羽母が含まれることが指摘されている(論文II)。筆者の調査でもその点は変わらない。前半と後半とに分けて、左に挙例する。

(前半) (掲出字の下には点の位置と所在を示す。以下、同じ。)

匣母(全濁) 和 A二二三 瑚 A三七五 行 B三〇四

咸 B三二四 醜 D三〇七 慧 H一九二

會 H二七七 誰 I二六四 合 L二八五

或 L三七三

曉母(全清) 軟 C二八五

右の全十一例の内、匣母(全濁)字には、去声に軽点が見られる他は重点が加点されており、曉母(全清)の字には、軽点が加点されている。よって、前半のL点は、四声を示すだけでなく、軽重をも示していると解される。

これに対し、後半は、次のとおりである。

(後半) (影印は省略する)

匣母(全濁) 黄(A八四七) 颯(A一〇二六) 惶(A一〇六三) 豪(A一三〇一) 弘(A一三三二) 何(AD一三六二) 莖(A一三七六) 閑(B四一二) 肴(B四四四) 和(B四七三) 瑕(B六四一) 瑰(B六六七) 含(B一三八二) 雇(D一三〇四) 晁(D一三八三) 怙(E一二二二) 厚(E一三五三) 号(H四九五) 横(H一二三三) 畫(I六九七) 害(I八八七) 互(I八九六) 穴(K一二二一) 狹(L八八五)

曉母(全清) 嬉(B八八一) 朽(E八六七) 火(E八七七) 曉(E七六六) 毀(E九三七) 虫(E一〇三一) 悔(H五六六) 誨(H一一三三) 弁(H一三七二) 歎(J八七七) 黑(J一一〇一) 忽(K一一一)

牀母(全濁) 士(D四九一) 助(I五六五)

山母(全清) 使(E五八六)

于母(次濁) 矣(E六二四) 右(E一二四六) 衛(I九二一)

後半の四三例も、匣母・曉母の例が多い。しかし、前半には存しなかつた牀・山・于母に合計六例の加點例が見られる。¹⁾

匣母では重点が多いが、前半と異なり、上声にも軽点が存する。曉母(全清)に重点が二例あるのも前半と異なる。

右によって、L点は、星点と同様、前半部分では軽重を区別しており(ただし、去声は随意的)、後半はその区別が乱れていることが知られる。

⑥二点(論文IIのH型)

L点は、次の初母(次清) 四例がすべてである。

又(B二二三) 察(J四八七) 測(K五八四) 刹(K五九二)

これは、:点と同機能と考えて良いであろう。なぜLの形なのかについて、論文IIに解釈が示されている。

⑦一点(論文IIのI型)

一点は、後半部分の「簇(B七一七)」「匣母」のみである。L点に変形したものである。

以上の検討によって、従来指摘されていた各種声点が担う機能と一致しない例が、後半に多いことが知られた。また、星点以外にも、軽重を区別していると判断される声点(圏点・…点・L点)があり、後半はその区別が厳密に行われていないことが判明した。

先学が、本資料掲出字声点に原則からはずれる例が多いとしたのは、後半声点と前半声点をを一括処理したことが一因である(ただし、論文IIには、「本文の冒頭に近い部分」に上声重点が多いという指摘がある)。

II. 反切字声点

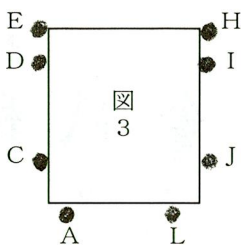
本資料の反切声点は、論文IIで、「おおむね、『六声』」「*pote nta*」には『八声』とみるべきであるかもしれない」とされている。しかし、具体的な検討は省略されている。よって、ここでは、掲出字声点と同様の整理を試みたい。

なお、本資料に書き込まれている「平上去入_{依下字} 軽重清濁_{依上字}」という原則から、反切上字と反切下字とで加點が異なる可能性がある。そこで、これらに分けて検討する。

1. 反切上字の声点

反切字は、掲出字と比べて小さく書かれ、声点加點位置の認定がより困難である。しかし、声点自体も小ぶりなため、掲出字と同様にA~Lの位置を設定し、認定・整理することができる。結果は、後掲表3となる(補入・欄外の反切声点は、除外した)。

この表3をこれまでと同様にまとめると、次の声点図3となる。



右の図3は、図1（前半掲出字）とまったく等しいものである。しかし、声点加点の実態（表3）は、前半掲出字（表1）と次の点で異なる。

○上声全濁字が去声化した例がある。○F・G点が無い。

○前半掲出字と比べて、B点が多。

また、従来の研究では、反切字の上声重点（D点）と去声重点

（I点）は指摘されていなかった。よって、左に両者に認定した全例を掲げる。

D点

（反切上字上声次濁）

運 以 然 反 一四四
藥 以 灼 反 二〇五

（反切上字上声全濁）

學 入 角 反 一六四
六 乙 舌 反 一七一

在 在 赤 反 一八一
行 下 區 反 三〇四

誰 誰 市 反 三二一
去 校 迤 反 三二三

（反切上字平声全濁）

坐 但 果 反 二五六

I点

（反切上字去声次濁）

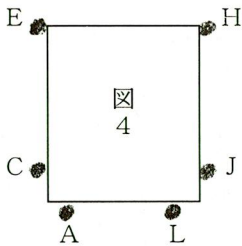
專 謂 坪 反 二五四

（反切上字去声全濁）

脛 身 浪 反 一九一
遠 但 葛 反 一九三

2. 反切下字の声点

右と同様に反切下字の声点を処理すると、後掲表4が得られる。この表4から、反切下字の声点は、上声・去声の軽重を区別しないと判断される。よって、反切下字声点の基本位置を示せば、次の図4となる。（入声重点は、K・L点のどちらとも決められないが、平声重点と対照となるL点を採用した。）



右は、六声体系の声点図である。しかし、上声全濁字の去声化例が一例（『玉篇』の反切で、掲出字にも去声点が加点されている）のみである点は、日本漢音の傾向に反する。

III. 右以外の声点

1. 反切以外の注文声点

本資料前半部分の注文には、反切字以外の漢字にも声点が加添されている。それは、陀羅尼・梵語音写字の声点を除き、全一八七例である。それらを、これまでと同様に整理すると表5となる。

固有名詞に呉音の声調が含まれているらしく、『廣韻』の四声をはずれるものが掲出字声点・反切声点と比べて多い。しかし、中心の体系は、平声・入声に軽重を区別する六声体系であると判断される。また、少数例中ではあるが、上声全濁字の去声化が見られる。

2. 序文の声点

本資料の序文には、朱の圈声点が七例存する。少数例のため、当該字を掲げるとどめる（声点位置・所在の下に『廣韻』声調清濁を記した）。

跛 (H53 去全清) 驚 (J53 入全清) 景 (E54 上全清)
 子 (E54 上全清) 建 (H55 去全清) 酉 (E55 上全濁)
 朔 (J55 入全清)

IV. 声点加添様式の整理

前節までに、本資料の漢字に加添された声点全体を見てきた。その結果、いくつかの加添様式が混在していることが知られた。

それらは、次のように分類することができる。

- A. 上声重点が見られず、上声全濁字去声化例が存するもの。
 反切以外の注文声点 (表5)
- B. 上声重点が見られ、上声全濁字去声化例が存しないもの。
 前半掲出字星点 (表1) ・ 後半掲出字星点 (表2)

C. 上声重点・上声全濁字去声化例ともに存するもの。

反切上字声点 (表3)

D. 上声重点・上声全濁字去声化例ともに存しないもの。

反切下字声点 (表4)

注文において、反切と反切以外とが別人によって加添されたとは考えがたい。よって、当時の日本漢音として一般的なもの (A) とそれと異なるもの (BCD) との加添が同一人物によってなされたということになる。この前提のもとでは、その加添者の基本的加添様式は当時一般のもの (A) であり、掲出字と反切の声点加添 (BCD) には特別な注意がはらわれたと考えるのが穏当であろう。

三、掲出字声点と反切字声点との関係

本節では、特別な注意がはらわれたと右に考えた掲出字と反切の声点加添が、いかにして可能であったかについて考察を加えたい。この説明ができれば、右の推定の支持要素となる。

I. 本資料表紙見返記事と声点加添

本資料の声点加添は、表紙見返に記された左の記事と関連が有ることが説かれている。

平上去入 <small>依下字</small>	濁平聲字輕重
輕重清濁 <small>依上字</small>	濁上入聲字重輕
	上聲字重短輕長
	從本清字但隨出來
	去聲字重長輕短

上段は、反切から掲出字の四声と輕重清濁とを導くための記事である。前節に見た掲出字声点と反切字声点の加添表態は、この上段記事によって理解できる。

すなわち、上段一行目「平上去入は、下字に依る」から、反切下字声点が軽重の区別は不正確でありながら、四声の枠は厳重に守っており、上声全濁字に去声点を加点することが無い実態(表4)が理解される。

上段二行目「軽重清濁は、上字に依る」により、反切上字声点が軽重を区別して加点されていた事実(表3)が理解できる。

よつて、掲出字声点と反切声点とが密接な関係を持つことが予想される。そこで、次に、両者の関係を調査する。

II. 掲出字声点と反切下字声点

まず、掲出字声点と反切下字声点との四声軽重の対応関係を示すと、表6となる。⁽¹⁴⁾

表6 反切下字声点

	平重	平軽	上	去	入軽	入重
平重	4 0	3 8		2		
平軽	5 7	2 5		1	1	
上重			1 3			
上軽			5 1			
去軽				4 4		
去重				9		
入軽					4 2	9
入重		1			1 3	6

表6によつて、反切下字声点の四声と掲出字の四声とが一致していることが知られる。一致しない五例は、いずれも掲出字に二つの声点が入り、その一方が反切声点と一致しない例である。

反切下字声点の四声と掲出字声点の四声とが一致するのは、当然のことである。しかし、右の五例を除けば、全く例外が無いことは注目される。

なお、四声は一致しながら軽重に不一致例が多いのは、反切下字声点が軽重を厳密に区別していないためである。

III. 掲出字声点と反切上字声点 — 表紙見返中段記事の解釈 —

右と同様に、掲出字声点と反切上字声点との四声軽重の対応関係を表にすると、左の表7となる。表紙見返記事上段二行目「軽重清濁は、上字に依る」のとおり、掲出字声点と反切上字声点との軽重が一致している欄に網掛けを施した。

表7 反切上字声点

	平重	平軽	上重	上軽	去軽	去重	入軽	入重
平重	2 7		3	ア 1 2	イ 1 0	2	ウ 8	エ 1 1
平軽	エ 5	3 0		2 4			1 9	オ 4
上重	9		1	カ 1	キ 1			2
上軽	ク 1 4	2 2		5			7	ケ 1
去軽	コ 1 8	3	サ 1	1 0			1 5	シ 4
去重	8						ス 1	
入軽	セ 9	1 9	ソ 1	1 2	3		6	
入重	1 1	ク 1	2		チ 2	1	ツ 2	1

全三四八例のうち七割余の二五三例は網掛けの欄に入っており、

反切上字声点の軽重と掲出字声点の軽重とが、上段記事のとおり、基本的には一致していることが知られる。

しかし、上段の記事に合わず、反切上字声点の軽重と掲出字声点の軽重とが不一致の欄（表中のA、ツ）にも少なからぬ例が存する。

ここで、表紙見返中段の記事に注目したい。加点されているヲコト点（喜多院点）によって訓読する。

濁平聲字（ハ）軽（ナレ）ども重（ニ）して濁上入聲字（ハ）重（ナレ）

ども軽（ニ）して本從（リ）清（メル）字をば但出来（ニ）隨（フ）

本記事中の「濁」は、日本漢音において濁音となるのが一般的な次濁音であるとされている（論文IV）。筆者もそれが妥当な解釈であると思う。

この中段記事は、反切の四声軽重清濁から掲出字のそれを導くための上段記事に続いて記されている。よって、この中段の記事も、反切上字軽重と掲出字軽重との関係を記していると考えることができ。そのように解釈すると、中段の記事は次の内容を示していることになる。三点に分けて記す。

X. 濁平聲字（ハ）軽（ナレ）ども重（ニ）して

（掲出字が平声次濁字の場合は、反切上字が軽声であっても掲出字は重声となり、）

Y. 濁上入聲字（ハ）重（ナレ）ども軽（ニ）して

（掲出字が上声次濁字・入声次濁字の場合は、反切上字が重声であっても掲出字は軽声となり、）

Z. 本從（リ）清（メル）字をば但出来（ニ）隨（フ）

（掲出字が次濁字以外の場合は、反切上字の軽重と掲出字の軽重とは一致する。）

すなわち、反切上字軽重と掲出字軽重とが一致しない場合の規則（XY）と、反切上字と掲出字との軽重が一致する原則（Z）とを述べていることになる。

このように解釈した場合に、XYに符合する場合をすべて検討する（具体例は、掲出字と所在のみを記す。星点以外の声点は、所在の後に注記する）。

Xに符合する例（掲出字は、平声次濁字。）

x1 反切上字平声軽―掲出字平声重

（例無し。）

x2 反切上字上声軽―掲出字平声重

聞（九六）無（二二一）名（二二七）難（一五四）量（一八四）眉（二一六）

六（三二一）疑（三二五）言（三二六）蔽（三二七）柔（三三五）

五）奴（三八四）（表7ア欄全一二例の全例）

x3 反切上字去声軽―掲出字平声重

王（二〇一）蓮（九一）文（二〇二）（表7イ欄全一〇例の内、三

例。残る七例は、すべて掲出字平声全濁字）

x4 反切上字入声軽―掲出字平声重

摩（一三二）樓（一三三）離（一四七）輪（一八二）龍（二二二）欄（三九四）曼（二七二）（圈点）

（表7ウ欄全八例の内、七例。残る一例波（一四七）は、梵語音写字である。）

右のとおり、x2とx4に比較的例が多い。

x2（反切上字上声軽―掲出字平声重）に例が多いのは、日本漢音で上声の軽重を区別する場合、次濁字は軽声になることを示すものである。なお、掲出字平声次濁字で、反切上字上声重―掲出字平

声重となるのは、一例のみである。

x4 (反切上字入声軽―掲出字平声重) は、日本漢音では、平声次濁字は重声、入声次濁字は軽声になるために、比較的数量が多い。ただし、掲出字平声次濁字で、反切上字入声重―掲出字平声重の例も三例存する(羅(一一五)連(一四二)陵(一五二))。

x1 (反切上字平声軽―掲出字平声重) に例が無いのは、ともに平声で、軽重が一致するためであろう。反切上字平声重―掲出字平声重の組には二七例が存し(表7)、内十一例が次濁字である。

x3 (反切上字去声軽―掲出字平声重) は表7イ欄の三例であり、イ欄には掲出字平声全濁字の例が七例ある。去声に軽重を区別する場合、次濁と全濁が重声になると考えられる(論文IV)ため、反切上字次濁字に加点された軽点は、軽重の区別がなされていない例と考えられる。他に、掲出字平声次濁字で、反切上字去声重―掲出字平声重であるものに「韋(二五4)」の例が存する。

Yに符合する例(掲出字は、上声次濁字または入声次濁字。)
掲出字上声次濁字

y1 反切上字平声重―掲出字上声軽

惱(一二二) 有(一二五) 若(一三一) 勇(二〇六) 尔(二一四) 遶(二六一) 老(三六二) 腦(三八二) 螺(三三四) 養(一八三) 圈(二七1) 圈点

(表7ク欄全一四例の内、一一例。残る三例は、全濁辨(一八1) 盡(一一7) 圈点) 全清 小(二八3) である。
y2 反切上字上声重―掲出字上声軽

(例無し。)

y3 反切上字去声重―掲出字上声軽

(例無し。)

y4 反切上字入声重―掲出字上声軽

(例無し。)

掲出字入声次濁字

y5 反切上字平声重―掲出字入声軽

日(一三一) 藐(二七4) 入(一九二) 月(二〇七) 越(二一1) 若(二三7) 獄(二九五) 涅(三一1) 業(三四5)

(表7セ欄全九例の全例)

y6 反切上字上声重―掲出字入声軽

葉(二〇5) (表7ソ欄の唯一例)

y7 反切上字去声重―掲出字入声軽

(例無し。)

y8 反切上字入声重―掲出字入声軽

(例無し。)

右のごとく、y1とy5とに例が多い。

y1 (反切上字平声重―掲出字上声軽) に例が多いのは、日本漢音では、平声次濁字は重声であるが、上声次濁字は軽声になることを示すものであろう。なお、掲出字上声次濁字で反切上字平声重―掲出字上声重の例は、無い。

y5 (反切上字平声重―掲出字入声軽) に例が多いのは、日本漢音では、平声次濁字は重声になるが、入声次濁字は軽声だからである。なお、掲出字入声次濁字で反切上字平声重―掲出字入声重の例が、葉(一三三) 勒(二一二) 略(三七三) の三例存する。これは、反

切上字の重声にひかれたものかもしれない。

y6 (反切上字上声重―掲出字入声軽) は、孤例である。掲出字入声次濁字で、反切上字上声軽―掲出字入声軽の加声例「悦(三四二)」も存する。

y2 (反切上字上声重―掲出字上声軽) ・ y8 (反切上字入声重―掲出字入声軽) に例が見られないのは、反切上字と掲出字とが同一声調であるためであろう。

y3 (反切上字去声重―掲出字上声軽) ・ y7 (反切上字去声重―掲出字入声軽) にも例が無い。しかし、反切上字に去声重点が加声された例が全三例であるので、意味があるものか否か明確でない。

y4 (反切上字入声重―掲出字上声軽) も例が存しない。これは、日本漢音において、入声次濁字は軽声であるため、本資料でも反切上字入声次濁字に入声重点が加えられることが少ない(四例)ためであろう。

以上、中段記事を先のごとくに解釈したXYに符合する場合をすべて検討した結果、上段記事に合わない例の多くのものが、右の解釈による中段の記事に符合した。また、例の見られる場合と見られない場合との理由づけもある程度考えられた。

Z「掲出字が次濁字以外の場合は、反切上字の軽重と掲出字の軽重とは一致する。」の原則に本資料が従っていることは、先に確認したところである。

右の中段の記事によって処理してもなお残る反切上字・掲出字軽重不一致例には、先に区別が不徹底であることを指摘した去声軽重にかかわるものが多い。

コ平声重―去声軽(一八例) チ去声軽―入声重(二例)

キ去声軽―上声重(一例) サ上声重―去声軽(一例)

シ入声重―去声軽(一例) ス入声軽―去声重(一例)

右以外のものは、いずれも少数例の次欄に属す。¹⁵⁾

エ平声重―平声軽(五例) オ入声重―平声軽(四例)

ツ入声軽―入声重(二例) カ上声軽―上声重(一例)

ケ入声重―上声軽(一例) タ平声軽―入声重(一例)

右によって、本資料の声点加音が表紙見返中段記事に符合することが知られた。

中段記事に去声次濁字について何も書かれていないのは、右に見たとおり、去声の軽重の区別が不徹底なため、原則的なことを書かないからであろう。

ところで、本資料表紙見返記事下段には、次の記事が存する。¹⁶⁾

上聲字(ハ)重をば短(ニ)して 軽をば長(三)して

去聲字(ハ)重をば長(三)して 軽をば短(ニ)して

右は、上声と去声の軽重の調値について述べている。上段・中段の記事は、調類を決定する方法について述べていたので、調値について記すのは、この下段記事だけである。

調値は、発端高度・調型・継続時間の三要素に分析される。この記事は、上声・去声の軽重の継続時間が異なることを記していると解釈される。しかし、その他の発端高度・調型が、上声の軽重、去声の軽重でそれぞれ同じであったのかどうかは不明である。

平声・入声の軽重の調値については、記事中に何も述べていないことから、これは当時注記するまでもなく明らかなものだったのであろう。逆に考えると、この下段のような記事が必要とする上声・去声の軽重の調値は、区別困難であったということになる。

以上の検討によつて、掲出字声点と反切声点との密接な関係が判明した。当時としては特異な前半掲出字声点・反切声点は、掲出字と反切との四声軽重清濁の対応関係を意識した厳密な加点によつて生まれたものと考えられる。一方、後半掲出字の声点加点が前半と比べて曖昧になるのは、反切の声点を加点しなくなったこととの反映であると推察される。⁽¹⁷⁾

四、本資料の声点と調値

前節までの検討によつて、本資料加点者の基本的声調体系は六声体系であり、掲出字と反切との声点は、表紙見返記事のとおり注意深く加点されていると考えられた。

そこで、次に、上声・去声の軽重を理論的に区別することによつて、何の区別を示そうとしたのが問題として残る。

調値の相違を示そうとしたと考えるのが単純な考え方である。しかし、声点によつて声母の区別をも示そうとしたものであるという論も成立する。⁽¹⁸⁾

ただし、上声・去声の軽重がそれぞれ異なる調値に対応していないと考えると、次の疑問が解決できないように思う。

①本資料は、全濁匣母などを示す別形の声点を持つ。そして、それらの声点も軽重を区別していた。その軽重の区別が声母の区別を示すものであるならば、声母を二重表示していることになる。なぜその必要があったのか。

②去声では、軽重の区別が不徹底であるのはなぜか。

これらの疑問は、軽重の区別が調値の区別を反映すると考えると、

解消する。

すなわち、軽重の別が調値の相違を示していると考えれば、①の疑問は生じない。②は、「去声軽重は、調値上の区別が困難であつた」という従来の説によつて理解される。上声と去声とで軽重区別の厳密さに差が出るのは、加点が単なる理論上のもではなかつたためと考えられる。

よつて、軽重の区別は、調値の区別を反映したものと考える。

つぎに、いずれも上昇調であつたと推定される、上声重・去声軽・去声重の調値上の区別は可能であつたのかどうか問題となる。右では、去声の軽重も調値の違いを示そうとしたものと考えた。

よつて、去声軽重の区別が不徹底であるのは、大きな上昇(去声重)と小さな上昇(去声軽)とを区別できなかったためと考えられ、同じ理由で、上声重と去声軽重の上昇調の区別も困難であつたと思われる。本資料の加点者は、三者を理論的には区別できたであろうが、実際に発音し分けられたとは考え難い。⁽¹⁹⁾

結局、本資料全体を通じて、区別されていた調値は、低平調・高平調・上昇調・下降調・低平内破音・高平内破音の六種類であるということになる。

五、結び

最後に、醍醐寺蔵『妙法蓮華経釈文』の声点加点について、これまで述べてきたことの要点を記して、結びとする。

1. 前半掲出字と反切上字の声点は、上声・去声の軽重を区別している。ただし、去声の軽重の区別は随意的である。

2. 後半掲出字は、上声・去声とも軽重の区別をしているとは考

えがたい。(区別が存したとしても随意的である。)

3. 右の前半・後半による加点の相違は、反切声点によって加点したか否かによって生じた。

4. 表紙見返中段の記事は、反切上字軽重と掲出字軽重との対応関係規則について記したものである。

5. 本資料が区別する調値は、低平調・高平調・上昇調・下降調・低平内破音・高平内破音の六種類である。

本資料加点時(十世紀末より十一世紀初)の日本漢音においては、六声体系が一般的であり、本資料の声点加点者が有した体系も六声体系であった。それを反切によって理論的に、上声・去声にも軽重を区別しようとした結果が、本資料の声点加点(ただし、去声の区別は不徹底)であったと考えられる。

注

(1) 論文IV、築島裕『平安時代訓点本論考 研究篇』(汲古書院一九九六年)一六〇・四一頁、同「書評」馬淵和夫著『国語史叢考』(『国語学』第一九六集、一九九九年三月)参照。

(2) 注文に声点・ヲト点・仮名が無くなる箇所からを後半としたので、本資料における前半とは、巻上一九才六行目「華」の前まで、後半はこの「華」以降となる。ただし、後半部分に有りながら、注に加点の存する「令」(四二七)「賢」(一五七三)の二字は、前半に含めて処理する(論文V、参照)。

(3) 調査は、複製本および馬淵和夫博士・築島裕博士・小林芳規博士の共同調査になる移点本を小林博士より借覧したものに依

る。

(4) 全体に、次清字が少ないのは、本資料の掲出字においては、次清字に別形の声点を使用しているからである。また、「一」(九五)の入声点は、J・Kのどちらであるのか決められないので、保留した。

(5) 加点の基本位置については、認定が分かれていた(論文IIとIV)。筆者の認定では、平声・入声と上声・去声とが対照でなく、中院僧正点の八声体系とは異なる。しかし、E点とF点、G点とH点との数の差はわずかである。E・H点はそれぞれD・I点のずれを含む可能性を考えると、F・G点が本来の基本位置であった可能性もある。なお、I点は、G点と異なり、全濁・次濁に集中するため、去声重を示すために意図的に加点された可能性もある。しかし、少数例であるため、本文のように処理した。

(6) 有気音を示す：点は、陀羅尼の加点方式を導入したものであり、陀羅尼では平上去入の四声のみで軽声が無いことが指摘されている(沼本克明『日本漢字音の歴史的研究』(汲古書院、一九九七年)八〇六頁)。

(7) : 点は、四声を示すが軽重についてneutralであるという解釈が論文IIに示されている。

(8) .. 点は軽重が定まっているものであった可能性が有ることが、論文II四九五頁に指摘されている。

(9) 論文IVで、後半の圈声点として挙げられている例のうち、「熱」は星点、「伶」^傳は上欄に注があることを示す点である。

(10) 「下」は、論文IVでも下よりの加点とされる。「下」「後」

は、『廣韻』にも上声全濁音が登録されている。「去」は、『廣韻』には上声・去声の次清音しか存しないが、本資料の反切上字に上声重の声点が加点されている。「大」は、「土」(三〇一)などの加点位置から下よりと判断したが疑問が残る。重点だとすると、『廣韻』には去声全濁音のみであるが、上声全濁音もあつたのであろう(論文IV参照)。

(11) 沼本克明『日本漢字音の歴史』(東京堂出版、一九八六年)一八四頁に加点理由の解釈がある。

(12) なお、『廣韻』上声全濁字に加点されたE点三例には、特殊な事情が存するようである。それらは、いずれも陀羅尼掲出字「耶」(一三五)に付された第二・三・四反切の声点である。

第一反切は「也遮反」であるが、注文の本文は、第二反切以下の「似嗟反」を良しとしている。ところが、上欄に「邪」と訂し、「ヤ」の仮名とA点とが朱で加点されており、朱点は第一反切を採っている。かりに、朱点が第二反切以下にも第一反切による声点を加点したとすると、E点が加点されることになる。

(13) 柏谷嘉弘「正応二年点白氏文集卷四の漢字音」(「神戸女子大学文学部紀要」第三一卷、一九九八年)に固有名詞に呉音が見られることが指摘されている。

(14) 当該例において、掲出字・反切下字ともに声点加点が見られる例に限る。次項の反切上字についても同様である。なお、掲出字声点とは、同体系と判断された、星点・圈点・点・点・点・点のことである。表では、各声点の数を一括したが、分けても同傾向である。なお、複数の反切が同一掲出字に存する場合には、

掲出字声点に対応する反切声点を選ぶこととし、特定できない場合は第一反切を選んだ。

(15) これらの例が生じた理由は、それぞれであろう。ただし、陀羅尼字が掲出字となつているものがある程度まとまつた数見られる。

(16) この下段の記事は、安然『悉曇藏』から始まるものであることが、論文IVに指摘されている。

(17) 後半掲出字声点は、平声・入声の軽重の区別も原則からはずれる例が多い。

(18) KOMATSU Hideo [Sino-Japanese Systems in Use] (ACTA ASIATICA) 65, 1993-8. 後、小松英雄「日本字音の諸体系——読誦音整備の目的を中心に——」として、築島裕編『日本漢字音史論輯』(汲古書院、一九九五年)に所収) 参照。

(19) 『作文大体』の「(前略) 上聲之重涉於去聲・々々之輕涉於上聲(後略)」(觀智院本)の記事も、上声・去声の軽重が区別困難であつたことを記したものである。このように考えると、反切上字に上声全濁字の去声化例が見られるのは、去声点を加点すれば上声重点を加点したのと同じことになると考えたためではないかと思われる。小さな反切字に上声の軽重を区別して加点することが困難と判断した場合、このような加点を行ったのではなからうか。

(20) 本資料の平声・入声の軽重は、同時期の他資料(『蒙求』など)と比べてゆれが少ない。この点も、反切の助けに負うものであろう。

表 1

前半掲出字星点と『廣韻』声調清濁対応表

廣韻 点	平 声				上 声				去 声				入 声				計
	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	
A	1		34	45			1					1					82
B	3		2	3													8
C	73	6	7	4													90
D							12										12
E	3				11		2	10									26
F					11	2		6									19
G								18	1	4	8						31
H	1	1					1	19	2	16	14						54
I								1		5	5						11
J			1										31			16	48
K														1	1	3	5
L													1		8	1	10

(延べ用例数である。空欄は用例が無いことを示す。以下同じ。)

表 2

後半掲出字星点と『廣韻』声調清濁対応表

廣韻 点	平 声				上 声				去 声				入 声				計
	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	
A	2		17	18			1										38
B	26	1	69	51			1								1		149
C	70	1	2	1													74
D					1		4										5
E		1	1	2	50	1	34	38			1	1					129
F					3		1		1								5
G									7		6	3					16
H			2	3					70	4	30	35	1				145
I	1										4	3					8
J													41	7	4	26	78
K	1												6	1	23	9	40
L															14	2	16

表 3 反切上字声点と『廣韻』声調清濁対応表

廣韻 点	平 声				上 声				去 声				入 声				計
	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	
A	3		48	39	1										1		92
B	2		10	13	1					1					1		29
C	82	13	2	3	1												100
D			1				6	2									9
E			2		47	5	3	30	1								88
F																	0
G																	0
H							5	1	2	1	7	4					20
I											2	1					3
J													36	7		21	64
K													2	2	2	2	8
L													2		12	2	16

表 4 反切下字声点と『廣韻』声調清濁対応表

廣韻 点	平 声				上 声				去 声				入 声				計
	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	
A	7		23	31													61
B	12		5	19					2			1					39
C	63	2	4	1													70
D					1		1	1									3
E					27	3	13	21	1								65
F					1	1	1	1									4
G									2								2
H	2						1		51	3	10	28					95
I									2	2	1	3					8
J	1												32	1	3	22	59
K													2		5	2	9
L													2		4		6

表 5

反切以外の注文声点と『廣韻』声調清濁対応表

廣韻 点	平 声				上 声				去 声				入 声				計
	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	全清	次清	全濁	次濁	
A	2	4	8	9								1		1			25
B	3	1	8	5	1	1							1				20
C	31	7	1														39
D																	0
E	1	1	1	2	16	3	2	7	1		1		1				36
F																	0
G																	0
H			3	1			5	3	14		7	9					42
I										1	1						2
J													9	2	1	3	15
K													3		1	1	5
L															3		3

〔付記〕本稿は、第七八回訓点語学会研究発表会（一九九八年五月二九日）での発表をもとに執筆したものである。席上、沼本克明・湯沢質幸・柏谷嘉弘の各先生より、貴重なご意見を戴いた。また、発表後も多くの先生方からご教示を頂戴し、投稿後、査読委員の皆様から多くの問題点をご指摘いただいた。これによって、大幅に改稿することができた。記して、御礼申し上げます。

〔ささき いさむ、広島大学助教授〕

（平成十一年五月六日受理）